

『NEWデリバリー通信』 Vol 1 0

先日 会社仲間との雑談で大町市の歴史についての話になり、あの道路はいつごろできたのかとか、おのお寺は以前はどこどこにあったのだとか内容は様々でした、気になった私は図書館へ出向き、大町市の資料を読み漁りました。すると様々な面白い内容の出来事や民話がありましたので順次 皆さんにご紹介していきたいと思ひます。

発行元：大町デリバリーサービス松尾新聞店

発行枚数：2600部

発行日：不定期 宅配されています信濃毎日新聞・朝日新聞・毎日新聞・産経新聞といっしょにお届けしております。ご意見感想お待ちしております！

『子供や孫に聞かせてやりたい大町の民話』

青木湖の主（あか牛） 平 青木地区



湖にむかって走り出す母ウシ。 絵...大町市、荒井泰三さん

『青木湖の西に青木という地区がありました。この村の百姓の家で、赤いウシを飼っていました。とてもきれいで立派な雌ウシで やがて子ウシを産みました。その子ウシもなかなかよいウシでした。その子ウシを青木湖の東の加蔵（かくら）地区に住むお百姓さんが譲り受けました。母ウシから引き離された子ウシは、母ウシを慕って夜になると西の青木に向かって悲しい声を上げて泣きました。「ンオーン、ンオーン。」静かな夜のことですから、それを母ウシが聞きつけました。母ウシはすぐに外に出ようとしてしまいましたが、小屋にはしっかり太い横木がわたしてあります。母ウシは大きな目をしばたかかせながら、その横木の間に入れたみたり出してみたりしましたが、横木はずれませんでした。他に外へ出る方法はないものかと小屋の中をうろろと歩き回っていると、湖の向こうから水の上をすべるようにまた母ウシを呼ぶ声が聞こえてきました。「ンオーン、ンオーン、ンオーン。」

次の日、母ウシは飼い主に引かれて、遠い田んぼからわらをたくさん運びました。わらは、冬の間にもしろを編んだり、俵やかますを作ったり、小さく刻んで綿の代わりにしてわらぶとんを作ったりするのに使います。だから冬が来る前にたくさん運んでおきます。秋も深まった青木湖に沿った道を背中に積みあげられたわらをゆっさゆっさゆすりながら、母ウシはひかれていました。その目は、ゆうべ子ウシの声が聞こえてきた方を、じっと見ていました。夜、小屋の中で母ウ

シは一生懸命出口をさがしてました。狭いウシ小屋の中をあちこち歩き回り大きな目をしばたかかせていると、やっぱり今夜も向こう岸から母ウシを呼ぶ声が聞こえてきました。

「ンオーン、ンオーン、ンオーン。」いたたまれなくなった母ウシは、思い切り背中を丸めると、力まかせに狭い横木の間にとびこみました。カーンと太い横木がはじきとばされると、土間の戸口から黒いかたまりのようになって、一気に外に走り出しました。外は、真っ暗でした。寒い中で月がぼうっとかすんでいました。その月を映して、湖もぼうっとにぶく光っていました。向こう岸の方から、はっきりと母ウシを呼ぶ子ウシの声が聞こえてきます。とつぜん母ウシは、「ンモーン！」と闇がふるえるような大きな声を上げました。そして、ザバッと水の中に飛び込んだのです。それから向こう岸に向かってまっすぐ泳ぎ始めました。にぶく光っていた湖面が激しくゆれました。その湖面のゆれ方で、母ウシが今どこを泳いでいるのかわかりました。子ウシのいる東岸、加蔵の方に向かってまっすぐに進んでいきました。

ちょうど中間あたりに来た時です。水がひとときわ激しくゆれました。それから急に静かになったのです。母ウシが力尽きて沈んでいった瞬間でした。

子ウシのところへ、子ウシのところへ...母ウシの熱い思いは子ウシのところまで届かず水のなかへと消えました。母ウシの命をのみこんで、青木湖はまた何ごともなかったように静まり返りました。

この時から青木湖の底には、赤いウシがいる、青木湖の主はウシであると言われるようになったということです。』（参考資料 あづみ野大町の民話、編集・あづみ野児童文学会、絵・荒井泰三。この本のお求めはお近くの本屋さんで。）

また、この『青木湖の主』ですが、違う参考資料にも記載されており、その中では『主』となるまではほぼ同じ内容になっていますが、最後に

『そのことがあってから後、湖へ引き込まれるように沈んで、上がって来ない人がでるようになった。湖畔の人々は、青木に沈んで湖の主になった赤ウシが、ときどきいらだって人を引き込むにちがいないというようになった。昭和の今日でも年に何人かが引き込まれてしまう。昭和五十年（1975年）の一月一日には、二十四人ものが一度に引き込まれてしまった。』 っと文章を締めくくっています。二十四人が引き込まれたというのはこの時起きた、スキー客満杯のバスが湖に落ちた事故をさしています。（参考資料 北アルプス大町ものがたり 大町市の石沢さん）

新聞に載らない内緒話！

「派遣」 日比谷公園の、「年越し派遣村」に着いたのは正午過ぎだった。ちょうど昼食が始まったようで、配給を待つ3列縦隊がノロノロと動き始めていた。正月の、あっけらかんと明るい陽光と刺すような日陰の明暗。日比谷図書館脇の、50メートルほどの列は次々と合流する人の群れを呑み込んで、黒い影をさらに長く伸ばした。

「寒い中、長い間お待たせしました。今から順次配給を開始いたします。押し合わないで。食べ物は十分にありますから」。

ボランティアの声が響く中、20人ほどを一区切りに、段ボールを重ねたテーブルだけの配給所へ人々が向かう。最初に小さなお菓子、続いて蜜柑、バナナなどの果物類。「すぐにポケットに入れてください。両手を空けておいてください」と声がかかる。それもそのはずで、すぐに紙の平皿とやや深めの皿を手渡され、その中には人参、大根などを煮込んだスープが注ぎ込まれる。さらにU字にくねったテーブルを回ると「これも持って行ってください」とラップに小さく包まれた漬物、海苔のかかったおにぎり2個がポケットにねじ込まれる。お茶かコーヒーの入った紙コップをわずかに空いた手で受け取り、彼らは公園内に三々五々散っていった。

別に設えられたテーブルには簡易カイロ、手袋、靴下、マフラーなど防寒具が用意されており、欲しければ手に入れる事が出来る。午後2時からは甘酒、蒸かしたサツマイモも用意された。再び長い列が二重三重とうねり、歩道を占拠した。

「派遣切り」「解雇」によって多くの派遣労働者、期間工が仕事と住居を奪われホームレス状態になった。「村」事務局を兼ねた大型テントにはカンパを求めるブースの他に、健康相談コーナー、住居案内、就職斡旋、再就職用の履歴書用紙までが無料で手に入る。ボランティアが次々と登録を行い、当初彼らの目印だったバンダナはすではげ、「ボランティア」と書き込まれたガムテープを貼り付けた支援者たちが公園内の濃紺のテントの間を右往左往している。

「四日市で働いていたけど、どうも危ないと思ってね。稼ぎに東京へやってきたが宿代が高くて資金が底をついた」「実家に戻る？ バツイチでね、親とうまくいっていないんだ。子供もいたんだが」。路上のストーブの周りで小さな声が聞こえてくる。

しかし、そんな風景を遠巻きにして眺めていた、段ボールにくるまったホームレスが声を荒げた。

「馬鹿野郎！ オレたち、派遣以下だ。派遣にもなれないんだ」。

社会の、その底には際限がない。帰りがけ、配給で余った甘酒を一杯、「ご苦労さま」とねぎらわれて御馳走になった。甘いはずのそれは妙に塩っ気があって、奇妙な味がした。

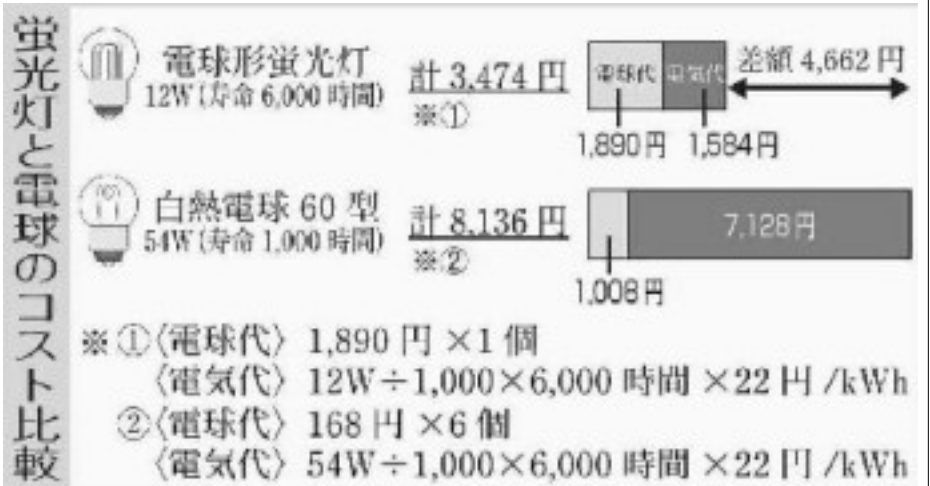
スポーツ、芸能情報は日刊スポーツで。購読申し込みは当店まで、もしくは日刊スポーツ販売局フリーダイヤル 0120・81・4356。



電球形蛍光灯

照明による電力消費は、家庭の消費電力量全体の約16%を占めています。その省エネ対策として注目を集めているのが電球形蛍光灯です。電球形蛍光灯は、白熱電球よりエネルギー効率が高く、消費電力が少ないのが特徴。現在、日本では約1億1600万個の白熱電球が使われていますが、これらをすべて、

電球形蛍光灯に交換すると、一酸化炭素の排出量が1年間で約200万トンを削減できます。さらに、電球形蛍光灯の寿命は、白熱電球の約6倍なので、電球を交換する回数が減り、廃棄物の削減にも。安いものなら100円前後の白熱電球に対し、電球形蛍光灯の価格は10倍以上もするのが普通ですが、電気代は安くなります。例えば、12ワットの電球形蛍光灯と「明るさの54ワットの白熱電球とを比べると、電気代は4分の1以下。電球代と電気代を合わせたコストを比べると、電球形蛍光灯は白熱電球の半分以下になり、光熱費の節約にもつながります。経済産業省では12年までに、家庭用の白熱電球を電球形蛍光灯に切り替えていく方針です。



グリーン電力

世界のエネルギー消費量は増加の一途をたどっています。これが、石油などの化石エネルギーの枯渇、一酸化炭素(CO2)排出による地球温暖化を引き起こしています。そこで今、注目を集めているのが、『グリーン電力』です。グリーン電力は、風力や太陽光、地熱、バイオマスなどの自然エネルギーから作られ、CO2や有害物質を排出しないため、環境への負荷が小さい電力です。枯渇の心配もなく、永続的に利用することができます。消費者がこのグリーン電力の普及に貢献できる方法があります。一つは、電気料金の支払い時に『グリーン電力基金』へ一定額の寄付をすること。集められた寄付金は、自然エネルギー施設への助成金に使われます。もう一つは、『グリーンエネルギーマーク』のついた製品を購入することです。このロゴマークは、財団法人日本エネルギー経済研究所グリーンエネルギー認証センターが、グリーン電力を使用して作られたと認められた製品についています。そのほかにも、グリーン電力を使用して開催されるイベントへの参加を通じて、グリーン電力に協賛する企業を応援することができます。



(有)大町デリバリーサービス松尾新聞店

大町市大町2675-7 (ハローワーク大町すぐ近く！)

電話：フリーダイヤル 0120-030553

FAX 0261-22-8402

HPアドレス : <http://shimbun.web.fc2.com/>

